

New Integrated Medical Lectures
「臨床診断学 診察編」

編集 阿部 正和・荒木 淑郎・大澤 忠
河合 忠・高久 史磨

日本大学助教授
岡 安 大 仁

本書をみて、まず最初に感ずることは、従来の診断学の教科書とも、またいままでの内科診断学書とも全く趣きを異にしていることである。最も大きな相違点は、本書が単なる内科の診断学ではなく、外科診断もあれば、皮膚科、泌尿器科、産科、婦人科の各科領域にわたって、それぞれの専門家がそれぞれの診察の仕方と評価の初歩を、学生にとりつきやすい形で要点を明らかにしながら要領よく書いていることである。

そこで私は、Conn の“Current Diagnosis”をもう一度手にとってみた。Conn のそれも、各科の専門家が全科にわたる疾患の要点をわかりやすくまとめていることは確かである。しかし本書のように、学生がベッドサイドに出て、患者をみる際に直接役に立つというのではない。今日的に言えば Conn のそれは、やはり disease oriented である。ではやや古いが Hac Bryde の“Sign and Symptom”はどうだろうか。それが古いか新しいかは別としても、症候の基礎的理解のために、従来から米国その他の学生に広く愛読されていたことは十分その価値があったからである。しかし、これとても、学生や研修医が、実習あるいは実践の場で一目で理解しその要領をそのまま利用しうものではない。

では本書はどうだろうか。disease oriented でもない、かといって symptom oriented でもない。各科領域に分かれているにせよ、むしろ、problem oriented であるといえよう。それは、診断という作業が、

最初から各科領域に分かれて存在しているわけではなく、患者の訴えに対する医師の応答であり、応答の必然が内科であり外科であるというにすぎず、患者のために自己の奉仕の場をより正しく認識し、さらには他科領域をも理解し、その場での最良のあるいは最小限の医療指針を与えねばならないということである。

さて本書の内容についてみると、I. 病歴のとり方、II. 診察の仕方と所見の評価、III. 診断への手がかりの三部門に分かれ、新しい医学部・医科大学での新しい医学教育に熱意を強く感じておられる方々が、それぞれの項目において、わかりやすく、かつ具体的に、要点を列記されている。さらに編者らが「診断のテクニックのみならず、診察から診断にいたるまでの、医師としてのオーソドックスな思考過程を会得できるように配慮されている」とのべてあるように、patient side に立った problem oriented なのである。しかも各領域分担者が、比較的むらなく、一定の形式にのっとり、また簡要の図を入れてあることは、読む側にとっても読み易く理解し易い。

最近、米国で出版された診断書では、Barbara Bates の“A Guide to Physical Examination”が本書に近い。その他類似の本が 2, 3 出版され、いずれも医学生とくにナースにとって、診察への手引きとして極めて教えられるところの多いものと思われるが、わが国ではまだそのような書はほとんどみられていないようである。しかし本書は、これらの入

門書よりはやや程度が高く、内容の充実度を感じる。それは「医学生ばかりでなく、研修医や実地医家の方が本書によって自分自身の日頃の診療態度を反省し、正しい診断のための眼を開いていただくことも本書編集の目的の一つとしたのである」との編者らの意向にも示されており、また本書を「新しい試みへの挑戦的野心作と受けとっていただいても結構である」との意気込みにも表われているといえよう。

以上から、本書を広く推薦したいが、さらに述べさせていただければ、本書のプライマリー・ケアにおける利用度の問題である。それともかなり高いものと感じるが、さらに欲をいえば、プライマリー・ケアに立った交通整理が、なんらかの形で必要ではなかったろうか。救急患者については、それなりにまとめられ要を得ていると思うが、1 人の患者を前にして、1 人の学生ないし 1 人の医師は、どのように行動すべきかは、単に診断のみにとどまらず切実かつ複雑な問題を秘めているからである。このような点で、本書がその企画の目的を十分果たしているとはいえず、lecture oriented であり、student oriented といった点がないでもない。そしてその点では、さらにプライマリー・ケアに立った別書の出現を期待したくなるといいたいののは評者の欲というものであろうか。

とにかく、最近にないユニークな、学生にとって、従来の診断学書からは得られなかった、生きた診断学書であり、研修医や看護婦実地医家ばかりでなく、自ら専門医として安住しているような、評者自身をも含めた多くの医師にとっても、身近かに置くべき良書と信ずる。もし本書が英語で書かれていれば、国際的にも多くの利用者が期待しうると信じて疑わない。

B 5 頁360 図217 写真86 1978

¥4,000 円300

<医学書院刊>